



ロータリー国際連会

ロータリー文庫について

ロータリー国際連会

ロータリー文庫運営委員会

1 まえがき

日本におけるロータリークラブの誕生は、1920年10月20日です。この日、銀行クラブに24名の創立会員が集まり、東京ロータリークラブの創立総会が開かれました。ロータリークラブ国際連合会に承認されたのは、翌1921年4月1日で登録番号855でした。

会長 米山梅吉、幹事 福島喜^き三^そ次、理事 伊東米次郎、樺山愛輔、小野英次郎で、創立総会後に新たにチャーターメンバーとして4名を加えた28名で出発しました。

この時から満50年を経た1970年5月、日本でのクラブ数は1,017、会員数50,128名となったのです。

その年の10月20日に、東京ロータリークラブ発足満50年を記念する簡素なうちにも華やかな祝典が開かれました。全国のガバナー、パストガバナーおよび東京都内のクラブ会長、幹事を招いて、その3月に新装開館した帝国ホテルの世界各国4,000を超すクラブのバナーで飾られた富士の間で行われました。

これより先、1966年1月1日のガバナー打ち合わせ会において、日本ロータリーの歴史の編集が発議決定され、1970年が東京ロータリークラブがつくられてから満50年になるのを記念し、その事業として「日本のロータリー

五十年史」を編集することが決定されました。この時から「ロータリー日本五十年史」編集のために資料の収集が始められました。

「ロータリー日本五十年史」は、1971年（昭和46年）6月30日に上梓されました。

2 「ロータリー文庫」の発足と発展の経緯

「ロータリー日本五十年史」が完成した後、五十年史委員会（宮脇 富委員長、後に柳瀬省吾委員長）によって集められた貴重な資料が散逸してしまっただけでなく、それらをまとめて何とか有効に活用する方法はないか、これらの資料をもとに、さらにロータリー関係の内外、また古い、さらに新しい資料も積極的に集めて、ロータリーを勉強してもらう材料として提供したらどうか、そのために図書館のようなものを作ったらどうかという話が、当時の連絡委員会でおこりました。

こうした考えが「ロータリー文庫」創設の発端となりました。また、「ロータリー日本五十年史」が発刊されると、日本各地のクラブで、ロータリーの歴史を勉強することが一時ブームになり、これに答えるために何らかの機関がほしい、個人で持っている貴重な資料をなんとか公開してもらう場ができればよい、というガ

バナー、パストガバナーの意見が一つになった結果も「ロータリー文庫」の誕生につながりました。さらに、日本人として最初の国際ロータリー会長として、1968～1969年に東ヶ崎 潔氏が選ばれたことも「ロータリー文庫」誕生の土壌として大きく影響しました。

このような環境のなかで、日本のロータリー創立50周年の記念事業の一つとして「ロータリー資料室」の設置が具体化することになりました。

「ロータリー資料室」設置は、日本ロータリー連絡委員会で決められ、正式決定は、1970年7月1日のガバナー会議で行われました。

その当時は、とにかくロータリーの資料を集めておくのだということで、単純に「ロータリー資料室」と名付けられたのです。

連絡委員会は今のガバナー会と異なり、直前ガバナーの集まりで、ガバナーは日常の公式訪問、その他の地区の仕事で忙しいから、日本全体のことについていろいろ調整したり打ち合わせたりする暇がない、これは直前ガバナーが手伝うべきだろうという意向から、直前ガバナーが連絡委員、そこにまた数名の日本のベテランのロータリアンが常任委員として加わってできた組織です。当時の連絡委員会委員長は柏原孫左衛門氏でした。

以上のようないきさつにより、1970年11月1日に、「ロータリー資料室」は、東京都中央区有楽町の有楽町ビル内の東ヶ崎 潔氏の事務所の一角、15坪の一室で呱呱の声をあげたのでした。

資料室の運営は、6名のパストガナバーで構成される管理委員会（後に運営委員会と改称）で行われることになり、初代委員長に西村二郎氏が、室長に堤 正元氏、主事に武者幸四郎氏が任命されました。

開室準備にあたって、多くの問題がありました。一つは五十年史の時の資料は、内容は貴重なものであるが、それほど数が沢山あったわけではないので、これから新しいもの、また古い資料をどのようにして集めるかということでした。二つには、ロータリー資料の分類をどうするかで、これは特に腐心したと、西村初代委員長は後に述懐しておられます。一般図書の整理と違って、ロータリーの構造、組織、性格などロータリー独自の項目を考え、項目別に文庫内資料の整理システムを作られたのでした。三つには、資金のことで資料室発足当初の予算は300万円で、最初は電話もなく、大福帳を回した時期もあったようです。

ロータリー資料の収集は、日本国内だけでなく、世界的な視点で広く求める方針がとられました。幸いパストガバナーの方々から、可成りご寄贈がありました。苦心したことはRIから公認されたわけではないので、直接、RI関係文献を入手するわけにはいかなかった状況でした。当時はまだ、日満ロータリー連合会を結成した第二次世界大戦前の影響が残っていたのか、日本だけで何かやることは、RIに警戒されるようなムードがあり、遠慮もあったようです。したがって、海外の資料はクラブを経由するなどの手段をとって手に入れたのでした。古いものを保存するばかりでなく、新しいロータリー資料を次々に加えていく、そういうシステムづくりが、「ロータリー資料室」の大きな目標とされていました。

このような努力の結果、1年間の準備期間中に資料の数は約2,000点になりました。

「ロータリー資料室」の運営にたずさわる管理委員会は、組織としては、日本ロータリー連絡委員会のもとに置かれ、経費も連絡委員会の歳入の中から「交付金」の形で支出されました。

かくして「ロータリー資料室」は、1971年(昭和46年)11月1日に公開されました。

1972年7月に「ロータリー日本五十年史」編集委員会の解散に際し、同委員会より「ロータリー資料室」に、2,000万円が寄託されました。

これは「ロータリー資料室」の基金とされました。

資料を集めることを管理委員会の当初の事業とした努力が実り、1973年には資料数4,000点になり、6月に「資料目録」がつくられるまでになりました。

この頃から「ロータリー資料室」というのは、単に資料をとっておくというような意味が強い、これからは資料の活用を考えるべきだとの事業方針の変更もあり、1973年9月17日に、「ロータリー資料室」から「ロータリー文庫」に改称することがきめられました。

1975年7月1日から「ロータリー文庫」の資金は、日本ロータリー連絡委員会の「交付金」から「地区のロータリー文庫運営協力金」に改定されました。協力金は会員各自が半期50円でありました。これはその後100円に、現在は会員一人当り半期150円になりました。

「ロータリー文庫」は1976年に東京都港区芝公園にあるabc会館7階に移転し、さらにその後2005年には、現在地の黒龍芝公園ビル3階に移りました。

資料が増加し書架が一杯になった頃から「より多くの会員に利用してもらわなければ、もっと活用してもらうにはどうすればよいか、待っているだけでなく、『ロータリー文庫』の存在を知ってもらうために積極的にPRすべきだ」という意見が、運営委員会（管理委員会）の事業目標となってきました。

「ロータリーの友」を通じての文庫の紹介、「文庫案内」の作成配布、「資料目録」の作成、「ガバナー月信」を媒体とした「文庫通信」など、積極的な企画、事業が進められてきました。

「文庫通信」は1985年津田進委員長によって始められたもので、ロータリーに関わる時期のテーマに沿った資料をタイムリーに紹介し、ロータリアンのロータリー研究の一助になっています。「文庫通信」は1999年以降は中山義之相談役が担当し、現在310号に至っており、毎月の「ガバナー月信」に掲載されています。又ロータリー文庫ホームページでもご覧いただけます。

3 「ロータリー文庫」の現状

(1) 文庫所蔵資料

現在ロータリー文庫には2万3千点余りのロータリーに関する資料が、収集整備され、ロータリアンの利用に備えて

おります。

資料の全容は、「資料目録―総括ダイジェスト版―」により概観できます。

これによりますと、資料がロータリー組織に基づいた分類項目によって体系的に紹介されています。つまり、総括、国際ロータリー、日本、地区、クラブ、外国、古文献、ロータリー関係（その他）に大分類され、さらにそれぞれの分野が中ないし小分類項目に分類され、件名の検索が容易にできるようになっています。

「資料目録」や「文庫通信」のなかで、必要とされる資料は、すべてコピーサービス（有料1枚20円）が受けられます。視聴覚資料（フィルム、スライド）は借りることができます。「ロータリー文庫」の閲覧は自由です（月～金）。ただし図書の販売や貸し出し（視聴覚資料を除く）はしておりません。

(2)現状運営組織

現在常勤職員は、ロータリー文庫運営委員会主事藤沢悦子さんと事務職員今井晴美さんです。

資料の収集、整理、保管のほか、ロータリアンからの電話やファックス並びにメールによる相談、コピーサービスに対応しております。

文庫の運営は、9人の運営委員、2名の監査委員で構成されている運営委員会によって行われています。運営委員ならびに監査委員は、日本の34地区から順次選出されたパストガバナーです。元運営委員長は顧問、相談役として運営に参画しています。

運営委員、監査委員、顧問の任期は、いずれも3年です。

運営資金は、各地区からの「ロータリー文庫」運営協力金（会員1人当り半期150円）およびその他の収入（コピー代金など）によって賄っています。2011年度は運営資金として3,100万円を扱うようになりました。

(3) デジタル化の現状と今後の展望

1999年2月からはインターネットによる情報の公開が行われ、保有する資料をデータベース化し、「ロータリー文庫」ホームページを開設しました。アドレスは <http://www.rotary-bunko.gr.jp> です。

2006年より文献資料の電子化（PDF化）に着手し、PDF画像データで閲覧できる資料、文献を年々増加しています。

2010年4月にはホームページをリニューアルし、検索機能の充実により、資料がさがし易くなりました。

現在、著作権、個人情報等の問題を避けるため、著者の許諾をいただきながら、徐々に図書文献のPDF画像化を進めています。

今まで「文庫通信」や「最近のデジタル化資料」として「ガバナー月信」、「ロータリーの友」、地区大会の講演、シニア・リーダーの小論文などから、ロータリーに関わる時々のテーマに沿った記事をPDFデータでタイムリーに紹介してきました。このことは、いつでもどこでも閲覧でき、資料をコピーできるという点で「ロータリー文庫」をデジタル化する一過程として十分意味があったと考えられます。

現在行っているデジタル化は「画像」としてのデジタルデータ化であり、自由自在に流用し加工できる「テキスト」としてのデジタル化ではありませんが、今後はデジタルデータを飛躍的に増加、蓄積することによって高質なサービスを提供することを計画しています。

文庫の「長期計画」として、全国のロータリアンのニーズを的確に把握し、資料の取捨選択、優先順位を決定しながら資料の50%（6000点）を新たにPDF化し、そのうち10%（600点）の資料、例えば歴史文書、論文や研究資料をテキスト形式でデジタル化したいと考えています。

今後ロータリー資料の収集、保管はロータリー文庫の主要な使命であります。一方、全国のロータリアンが「当文庫を来館しなくても、コピー依頼をしなくてもいつでもどこでも閲覧できるようにすること」、さらに「データを活用し加工できるようなデジタル化を推進し、電子ライブラリーとしての機能を持つこと」を目指しています。

「ロータリー文庫」が果たすべき機能は、資料の収集と何時でもロータリアンが利用できるようにロータリー関係資料を分類整理する作業を、たゆむことなく続けていくことです。

文庫では今後も、国内外の新しいロータリー関係資料を集め、また、古文献の収集整備にも力を入れて、ロータリアンのお役に立ちたいと願っています。

「ロータリー文庫」は、日本の全てのクラブが関与しているものとして、「Japan Rotary Clubs Library」の名称を1999年より使用することがRIから承認されました。

今や堂々と世界に誇れる「ロータリー文庫」を活用して頂く方法をさらに研究し、ロータリアンとの交流を盛んにしたいと考えています。例えば、地区の会合やクラブの例会で、文庫の価値をお伝えしたいと願っています。

「ロータリーの友」は、ロータリーのニュース性を重視する日本のロータリー機関誌であります。これに対して「ロータリー文庫」は、国内外のロータリーの活動の結果の資料を収集整理し、次の時代に残すことが基本であります。

「ロータリー文庫」の需要とロータリアンのロータリーへの関心は、比例するものです。文庫の活用が盛んとなった時は、ロータリアンのロータリーへの関心が盛り上がり、ロータリーの活動は活発となった時だと申す事ができます。

「ロータリー文庫」はロータリアンとともに歩む、「ロータリーの夢の宝庫」なのです。

「ロータリー文庫」をご理解の上、ご活用を是非お願いいたします。

尚、日本ロータリー創立 100 周年（2020 年）に向けて「ロータリー日本 100 年史」の刊行が予定されております。これは当然ロータリーの友が行うことではありますが、ロータリー文庫の人的、資料的資源の活用が不可欠であり、ロータリーの友とロータリー文庫を中心とした編纂準備委員会の会合が 2012 年 11 月より始まっております。

ロータリー文庫運営委員会相談役
第2590地区パストガバナー
中山 義之(横浜南RC)

2013年6月30日発行



ロータリー文庫

〒105-0011

東京都港区芝公園2-6-15 黒龍芝公園ビル3階

TEL (03) 3433-6456 FAX (03) 3459-7506